人間と自然資源 第40回

砂漠に出現した未来都市［ドバイ］

砂漠の都市で持続可能な湿地の未来について考える

古田尚也 IUCN日本リエゾンオフィスコーディネーター

ここ20年ほどで急激に発展した砂漠の中の近代都市ドバイ。
世界的にヒトとモノが集まり続けるこうした都市の中で、
どのような自然と共生する未来を描いていくことができるだろうか。

撮影●古田尚也

Naoya Furuta
大正大学地域構想研究所教授。
東京大学大学院農学生命科学研究科
博士課程単位取得退学。三菱総合研究所を経て、
2009年よりIUCN（国際自然保護連合）の
日本オフィスにおいて生物多様性に関する
国内外の政策展開に従事する。

美しい白い砂浜が広がる「ジュメイラ・ビーチ・パーク」と、アラブの帆船をかたどったホテル「ブルジュ・アル・アラブ」。

世界の湿地を守るラムサール条約

2018年10月22～29日にかけて、湿地の保全に関するラムサール条約の第13回締約国会議がアラブ首長国連邦の都市、ドバイで開催された。

ラムサール条約は、「特に水鳥の生息地として国際的に重要な」湿地に関する条約」というのが正式名称であるが、この条約が採択されたイランの都市の名にちなんでラムサール条約と呼ばれている。

条約の正式名称にも示されているように、この条約が作られた目的は、もともと水鳥の生息地である湿地の保全と賢明な活用（ワイズユース）であった。しかし、時代とともにその目的も広がり、現在では水鳥ばかりでなく、他の生き物も含めた生物多様性や人間の福利に貢献する湿地生態系全体を視野に入れるようになっている。

ラムサール条約の第1条1項では、湿地を「天然のものであるか人工のものであるか、永続的なものであるか一時的なものであるかを問わず、更には水が滞っているか流れているか、淡水であるか汽水であるか鹹水（かんすい）（海水）であるかを問わず、沼沢地、湿原、泥炭地又は水域をいい、低潮時における水深が六メートルを超えない海域を含む」と定義している。

したがって、狭義の湿地や湿原だけでなく、湖沼、ダム湖、河川、ため池、湧水地、水田、遊水池、地下水系、塩性湿地、マングローブ林、干潟、藻場、サンゴ礁などもこの条約の対象となる。そして、これらの湿地が国際的な重要性に関する基準を満たし、国の法律によって自然環境が将来にわたり保全されるとともに、地元住民の賛意が得られることがラムサール条約への登録の条件となっている。

1971年に採択されたこの条約は、環境分野の国際条約としては最も古い条約のひとつでもある。71年といえば、スウェーデンのストックホルムで最初の国連の環境会議（通称「ストックホルム会議」）が開かれた前年にあたる。

つまり、この条約が誕生したときには、ストックホルム会議で設立が決まった国連環境計画もまだ存在していなかった。こうした歴史的背景もあり、その後誕生した気候変動枠組条約や生物多様性条約などとは異なり、ラムサール条約は国連ではなく、IUCN（国際自然保護連合）のスイス本部の中にその事務局が置かれている。

1 ラムサール条約COP13には、140カ国、1300人以上が参加した。
2 レセプションに集まった各国からの参加者。

持続可能な都市の未来のための湿地

このような長い歴史を持つラムサール条約で、13回目を迎えた今回の締約国会議（COP）のテーマは「持続可能な都市の未来のための湿地」。いまや世界人口の半分以上は都市に居住し、その割合は今後とも増加することが予想されている。さらに、こうした都市の多くは、沿岸地域や河川の流域といった湿地にとっても重要な地域に立地しており、高潮や洪水など気候変動の影響を受けやすい地域でもある。こうした観点から、今回のCOPのテーマは湿地の今日的課題に焦点をあてた、タイムリーなものであったといえるだろう。

会議には、世界140カ国以上から、政府、国際機関、NGOなど1300人以上が参加した。今回のCOPにあわせて宮城県南三陸町の志津川湾と東京都の葛西海浜公園が新たにラムサール湿地として登録された。また、兵庫県豊岡市の円山川（まるやまがわ）下流域及び周辺水田の拡張登録もされたことから、南三陸町の佐藤仁町長や豊岡市の中貝宗治市長をはじめ、日本からも多くの関係者が参加した。

日本国内では、今回の登録分も含め現在52カ所の湿地がラムサール条約に登録されている。世界全体でみると2300カ所以上の湿地がラムサール条約に登録されており、その面積の合計はデンマークのグリーンランドを越える、約249万614㎢にまで達している。

保全された自然環境を持つ湿地帯が数多く存在する一方で、世界の湿地に対する脅威は減じていない。条約事務局が今回のCOPで発表したGlobal Wetland Outlookによると、1970年から2015年の期間に、世界の約35％の湿地が消失し、2000年以降そのスピードはさらに加速しているのだという。

これは、世界人口の増加や多くの人々が沿岸部や河口の大都市に居住するようになったことによる、開発圧力の増加などが一因となっている。一方で、残された湿地についても汚染や外来種、ダムなどによる水の流れの分断などが大きな脅威となっている。

こうした湿地の減少や劣化は、そこを生息地とする水鳥などの野生生物の絶滅リスクを高めるだけでなく、清浄な飲料水、水産業や観光業などの産業、景観やアメニティーなどの生活の質等の観点から人間の暮らしにも大きな影響を与えることになる。

砂漠の国・ラムサールの条約登録湿地

今回のCOPは、アラブ諸国で開催された初めてのラムサール条約のCOPであった。ドバイは砂漠の真ん中につくられた近代都市だ。どうして、こんな砂漠の都市で湿地の国際会議が開かれたのかと不思議に思う読者もいるかもしれない。

しかし、意外にもドバイを擁するアラブ首長国連邦（UAE）には、ラムサール条約登録湿地がすでに8つも存在している。そのうちのひとつ、ラス・アル・ホール野生生物保護区はドバイ国際空港にも近い大都市の中のラムサール登録湿地となっている。

ドバイ・クリーク（入り江）の内陸部分にある面積約620haのこの湿地は、周囲を高速道路や高層ビルに囲まれつつも、干潟やマングローブの湿地、塩性湿地など

都市の中のラムサール登録湿地「ラス・アル・ホール野生生物保護区」。

世界第2の面積を誇る人工のマリーナの「ドバイ・マリーナ」など、ドバイでは近代的なインフラが次々に誕生している。

ドバイでもっとも美しいモスクと言われる「ジュメイラ・モスク」。

の貴重な自然環境が残されている。その豊かな生態系は、フラミンゴやサギ類などの水鳥を含む450種を超える動物種と47の植物種の生息地となっている。特に冬季には、アフリカと西アジアを行き来する渡り鳥にとって貴重な中継地点ともなっている。

このように、砂漠の国にもクリークやオアシス、マングローブやサンゴ礁などの生態系が存在し、それらが国際的に貴重な湿地生態系として積極的に保全されているのだ。

河口の港町から発展した近代都市ドバイ

UAEはドバイを含む7つの首長国が集まり、1971年にイギリスから独立して誕生した連邦国家である。7つの首長国の中でも、首都が置かれているアブダビとドバイがその中心だ。

かつては真珠採取や中継貿易などに頼る脆弱な経済基盤しか持たない国々だったが、50年代から60年代にかけてアブダビやドバイで石油が見つかると状況は一変する。特に、アブダビの石油・天然ガスの埋蔵量は膨大で、現在でもUAE全体の経済を支え続けている。

一方、アブダビほど石油資源に恵まれていなかったドバイは、早くから積極的に経済の多角化を進める戦略をとった。

もともとドバイ・クリークの河口で中継貿易を核とする小さな都市国家に過ぎなかったドバイであるが、50年代終わりから、当時の首長であったラーシド・ビン・サイード・アール・マクトゥームによってドバイ・クリークの浚渫事業など、大規模なインフラ整備が開始される。

80年代に入ると、オイルマネーを背景にした経済特区や大型港湾の整備、エミレーツ航空の就航などによって、海外からの投資や企業、人の進出が急速に進み、いまや中東における金融や流通、観光の一大拠点となるまでに急激に発展を遂げた。

その後も、ドバイで最も美しいビーチといわれるジュメイラ・ビーチの人工島に建設された世界最高級の〝7つ星〟高層ホテル「ブルジュ・アル・アラブ」をはじめ、地上828mと世界一の高さを誇る高層ビル「ブルジュ・ハリファ」、人工衛星からも確認できる椰子の木のような形をした「パーム・ジュメイラ」や世界地図を模した「ザ・ワールド」と呼ばれる人工島群、世界第2の面積を誇る人工のマリーナ「ドバイ・マリーナ」、人工スキー場「スキー・ドバイ」、世界最大規模のショッピングモール「ドバイ・モール」、さらに「ドバイメトロ」や「ドバイ・トラム」といった交通機関など、数多くの観光・都市インフラを次々に整備してきた。

こうした積極的な投資による多角化戦略が成功し、ドバイの経済は急成長するとともに、GDPに占める石油の割合は、現在では2%以下にまで低下している。

砂漠とオールドタウンに残されたエキゾチシズム

このように近代的な都市国家としての印象が強いドバイであるが、都市を一歩離れればそこには広大な砂漠がどこまでも広がるアラブのエキゾチックな風景が待ち構えている。この砂漠の中を4WD車で駆け巡るデザート・サファリと呼ばれるツアーも観光客に人気のアトラクションだ。

また、ドバイの発展の礎となったドバイ・クリーク河口部の北側のディラ地区、南側のバール・ドバイ地区はドバイのオールドタウンとなっている。歴史的建造物の保存、活用にも力を入れており、バール・ドバイにあるドバイで最も古いとされる要塞アル・ファヒディ・フォートは現在博物館として活用されている。また、近くには歴史的町並みを保全したアル・ファヒディ歴史地区があり、ドバイのもうひとつの観光スポットとなっている。

持続可能な都市に向け湿地を守り自然と共生する

今後、世界各地で気候変動の影響はますます顕著となる可能性が高いと予想されている。こうした中、沿岸や河川流域に位置し、ヒトやモノがますます集まり続ける大都市は、どのように災害に備えながら自然と共生する魅力的な都市を目指せばよいのだろうか。

アラビア海に面した砂漠の中に誕生し、ヒト・モノ・カネを集めて成長し続けるドバイは、今回ラムサール条約COPが掲げたこうしたテーマについて考え、議論するには格好の場所であったといえるだろう。

謝辞●本稿の作成にあたっては、日本国際湿地保全連合の支援を受けた。

1 ドバイの礎となったドバイ・クリークの河口。アブラとよばれる渡し舟が走る。2 オールドタウンに観光に来ていたイラン出身の女性たち。

3 さまざまな布が売られるテキスタイル・スーク（市場）。4 歴史的街並みが保全されている「アル・ファヒディ歴史地区」。

砂漠で妖艶な踊りを見せるベリーダンスの踊り子。

5 近代的な都市国家であるドバイであるが、車で少し走れば一面砂漠の景色が広がる。この砂漠を4WDで駆け巡るデザート・サファリ・ツアーも観光客に人気となっている。6 鷹狩りは砂漠での生活には欠かせないものだった。7 デザート・サファリ・ツアーで体験できるキャメル・ライド。